

Colorado Rocky Mountain High

FELLOW SKI

SKI TOUR PRODUCE COMPANY FELLOW TRAVEL SINCE 1978

VAIL & ASPEN

コロラド
ふたつの聖域を
滑り尽くす



introduction

「安近短」な時代に

取材協力_ (株)フェロートラベル
資料提供_コロラド州観光局
取材_加藤雅明 (SJ)



世界一高いところまで登れるチェアリフト、インペリアルエクスプレス。標高はなんと3914m!

「安近短の時代」と言われて久しい。

最近ではさらに、「簡単にできる」ことも時代のニーズを考えるうえで大切な要素だと言う。スキースポーツはこれらのセオリーからすると、対極のアイコンとして取り上げられる。バブル期にちよつとしたきっかけで弾みがつき、踊りに踊った産業であっただけに引き潮の勢いも激しく、世間の視線はどこか冷やかだ。

でも、このスポーツを愛し続けてきた人たちの心の底には、そうした世間の経済原理とは無縁の、平たく言えば、ロマン、とか、夢、などという少しばかり気恥ずかしい言葉でしか表わすことのできないコアな心情があるような気がし

てならない。それはけっして色あせることなく、生活はもとより、人生のなかに溶け込んでいる。

「安近短」で得られる経験がすべてではないことを少なからず僕たちは知っている。スキーに深くのめり込んだ人たちは、とくにそうだ。

故・三浦敬三さんは春になると立山の雄山へ自らの脚で登り、雪が降れば真っ先にカナダ・ウィスラーへ、日常はサッポロテイネで朝イチから滑った。オフシーズンはスキーのためにと食事に留意しつつ、トレーニングを欠かすことがなかった。安近短とは対極の生活である。平均滑走日数は150日。5カ月間、毎日スキーをしている勘定になる。





コロラド州ロッキー山脈のほぼ中心に位置するスノーマス。サミットへと登れば見える景色は山、また山。コロラド州には4000mオーバーの山が54カ所も存在する



Photo_Daniel Bayer



1_ブレッケンリッジ山頂付近。視界を遮るものは何もない 2_ひとたび降雪があれば、周囲はどこもパウダー天国。息もできないほどの粉雪が待っている 3_晴天に恵まれれば屋外で食事を楽しむ人がほとんど。レストランはかならずビューポイントに設置されている 4_イルミネーションに彩られたアスペンの街。雪降る夜のリゾートを歩くのもまた格別



Photo_Daniel Bayer



そうして101歳まで生きて滑った。スキーが安近短であったなら、あるいは安近短なスキーばかりだったなら、敬三さんはここまでスキーにのめり込んでいただろうか？ ただ斜面を上から下へ滑り降りるだけがスキーなら、ここまで情熱を注ぐことができただろうか？

大衆はトレンドをめざし、トレンドは

さまざまなものを飲み込んでいく。その踏み跡に価値を見出すのはむしろかしい。バブル崩壊後の日本のスキーもまた例外ではなかった。右から左へと大きく振れた針は、ついに行き場を失ってしまつたかに見える。

けれども、そんな金勘定の分析は、われわれいちスキーヤーにとって何の意味もない。なぜなら、スキーは今なおスキーとして変わることなく存在し、われわれを心から楽しませてくれるからだ。

世界へと出てみよう。そこには、スキースポーツの多様な魅力がはちきれんばかりに存在する。ひととき日本に現われた鉄骨造りの巨大な人工恐竜が倒れ、消えていっても、世界のスキーリゾートでは変わることなく、人々が雪山の美しさに感動しながら、健やかに飲びを享受している。

海外でスキーをすることは、いくつもの発見をもたらしてくれる生きた体験だ。たとえいくつ歳を重ねようと、その発見は新鮮である。

「安近短」などという呪文に惑わされ、島国特有の枠に閉じこめられないためにも、われわれは視野を広げる必要がある。

スキーを担いで遠く発見の旅へ出よう。もっともっといっばい汗を流そう。一期一会の出会いを大切に、その瞬間、瞬間を楽しもう。

そんなスキーの旅は、その後の人生にも少なからず影響を与えてくれるに違いない。

VAIL
&
ASPEN

コロラド ふたつの聖域を滑り尽くす



コロラドという名の贅沢

日本とほぼ同じ総面積を持つコロラド州。そこに54の4000m峰が連なっている。コロラドには豊富な雪と、自由で、陽気で、ダイナミックで、フレンドリーで、快適な時間が待っている。

U.S.A
Colorado



地球のパワーが凝縮した場所 コロラド

北米にはフォートナイター(Forty-eater) 14000フィート(4270m)以上の高さの山が88カ所存在する。そのうち54カ所がコロラド州に集中し、アラスカに22カ所、意外にもカナダにはアラスカと国境を分けている山が1カ所あるだけだ。コロラドは地球の地殻変動が盛んな頃、巨大なパワーが押し寄せ、凝縮された場所であり、ネイティブ・アメリカンの多くの部族がこの地を選んで古くから住んでいた事実を考えても、豊かで神聖な土地であった

たことが理解できる。

コロラドの玄関口はデンバー。日本からは、利用航空会社によって異なるがサンフランシスコかロサンゼルスを経由してデンバーに入る。ここはすでに標高1600mを超えていることから、マイル・ハイ・シティの愛称がつけられている。とはいえ、デンバーの周辺はまったく平坦で、自分の立っている位置が、白馬オリンピック・ダウンヒルコースのスタート地点よりもわずかに低い標高であるとは、ちょっと想像することができない。

東側には大平原が広がり、西側にはロッキーの山々が連なる。おそらく、西部開拓時代の人たちは、行く手をふさぐ山々を眺めながら、ここである種の覚悟を決めたに違いない。

今、注目される 標高という価値

「スキー天国」という形容詞は、まさにコロラドのためにあると言っている。ここには26もの広大なスキーリゾートが集まっており、標高が高いために早い時期から良質な降雪に恵まれる。空気が乾燥していることもあって一度雪が降ると長い期間上質な雪が保たれる。11月末になると準備のできたスキー場からオープンし、活気にあふれたウインターシーズンがやってくる。

たとえば世界を代表するスキーリゾートであるヴェイルの標高は、ペー



Photo_Matt Power

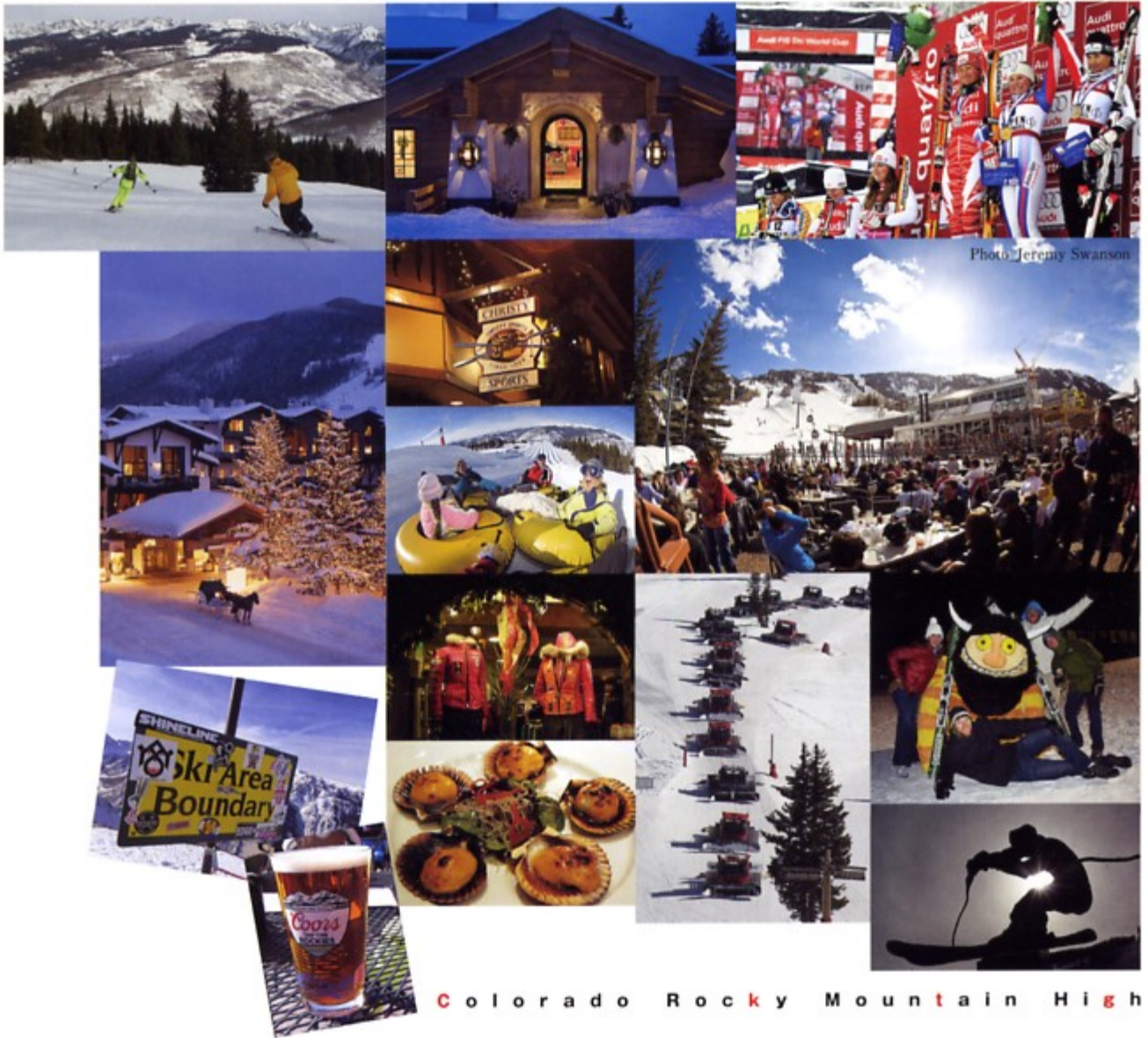


Photo Jeremy Swanson

C O L O R A D O R O C K Y M O U N T A I N H I G H

スで2475m。サミットに登ると3527mだが、この標高はコロラドの他のスキー場と比べて突出した高さではない。どのスキー場も概ねこのレベルの標高にあり、トップからボトムまでの標高差は1000mを超える。もし日本でこれらに匹敵する場所を探すとすると、残念ながら肩を並べるところが見当たらず、富士山を目安とし、「九合目から五合目あたり」などと表現しなければならなくなる。

北半球のスキーリゾートを俯瞰的に見たときに、もっとも早くから本格的に滑れるのはオーストリアの氷河スキー場である。例年であれば9月末には新雪が降るが、各国のナショナルチームがこぞってトレーニングに集まってくるために氷河の上はポールが林立し、競技力を高めたいといった目的意識がはっきりしている人は別として、一般スキーヤーが優雅に滑る雰囲気にはほど遠い。また地球温暖化によって、氷河にも少なからず影響が出てきていると聞く。その意味で標高が高く、雪質が良いということは、海外スキーを考えるうえでこれまで以上に重要な意味を持ち始めている。ここに来てコロラドが注目される理由はそんなところにもある。

世界のリゾートとコロラドの歴史

もちろんコロラドの魅力は高い標高だけではない。なぜコロラドに絶え間

なく世界中から人々が集まってくるのか、しばし、世界のスキーリゾート事情について説明が必要だろう。

ヨーロッパの山岳リゾートの多くは条件の良い場所に自然発生的に生まれた。山間部で酪農などを営みながら生活する人たちの村があり、その近くにリフトがかけられスキー場へと変貌していったケースである。村を中心とした落ち着いた雰囲気は、今もリゾートとして大切な要素を持っている。

一方、国策としていち早くスキーリゾートの整備に乗り出したのがフランスだ。もちろんフランスにも第一世代と呼ばれる、自然発生的なスキー場は多く点在するが、スキーに適したエリアに輸送能力の高い索道を整備し、そこに大規模ホテルを誘致し、周辺の国々からダイナミックにスキー客を呼び込む第二世代の近代的スキーリゾートを作り、観光立国として大きな経済効果を生み出した。フランスはスキーリゾートを計画的にプロモートし、世界のお手本となった。

一方、コロラドの第一世代のスキー場は、かつて金銀鉱山で栄えた地にリフトが導入されたケースだろう。アスペン、テルライド、シルバートン、ブレッケンリッジなどは、その好例だ。ヴェイルなどは、更地からリゾート作りが始まったため、マスタープランを立て、合理的かつ計画的に整備が進められた第二世代に属すると見て良い。フランスの近代的リゾート作りのノウ



ハウを学び、そこにスイス、オーストリアの牧歌的雲囲気の建築物などをトッピングしていく。さらにアメリカのスケールの大きいオペレーションがドッキングして、ヴェイルは「世界一」とも称されるリゾートタウンになった。つまり、世界の調味料をみごとに配した最高傑作がヴェイルと言えるだろう。

アメリカにおけるスキーリゾート開発は不動産投資の対象でもあり、その価値をいかに高めるかも重要な視点である。ヴェイルの開発がいずれ飽和状態になることを見越してスタートしたのがピーバークリークだ。ヴェイルが拡大路線を走ったのに対し、ピーバークリークは世界の富裕層のプライベートルゲレンデ的な雲囲気を醸し出し、景観にも極力配慮し、その希少価値を保つ努力がなされている。したがって、ピーバークリークはヴェイルにも増して気品が漂うリゾートタウンとなっている。

ヴェイル、ピーバークリークが成功を収めるのに合わせて、各地のスキー場のリニューアルも進み、巨大なスキー場が26カ所もひしめくコロラド州は、いまや世界のあこがれの地として認知されるようになったのである。

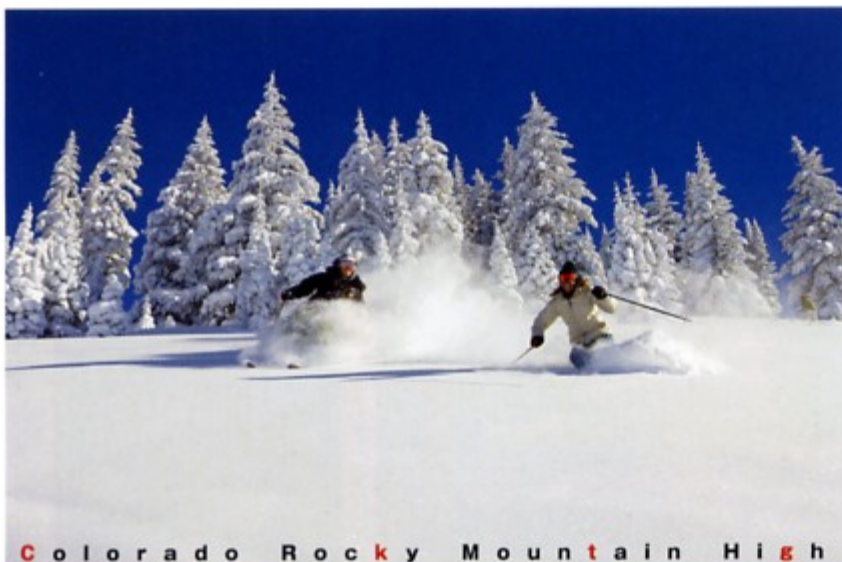
アメリカにおける エンターテインメントの重要性

ヨーロッパの一流スキーリゾートの観光資源は何より山岳景観にある。

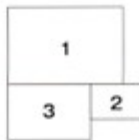
マッターホルンが象徴的なツェルマツトなどはその好例で、アルピニズムの世界が色濃く反映され、山小屋や農家の雲囲気を大切に残している。歴史あるスキーリゾートほどその傾向は根強い。都会では味わうことのできない、人間的な癒し。がここでのメインディッシュだ。

一方、アメリカの特徴はエンターテインメント性。極端な言い方をすれば、ディズニールンドのような仮想世界を山に持ち込むことに抵抗がないばかりか、むしろ積極的に取り入れる傾向が強い。これは歴史が浅く、多くの民族が集まって国家を形成しているアメリカの気質なのではないだろうか。

リゾートに一歩足を踏み入れれば、まるで遊園地にやってきたようなワクワクした気分がさせられる。リフト乗り場のスタッフは明るく軽快なノリで僕たちを迎え入れてくれる。すべてにおいて合理的で効率的、すみずみにおいてまで行き届いたサービス。そして、人々の冒険心を満足させ、サブライズを楽しむ姿勢はアメリカの人々に共通した心意気なのだろう。彼らにとってもっともイケてないのは、退屈な演出である。老若男女誰もが快適に、そして元気に過ごせる場所、それがアメリカのリゾートの真髄と言って良いだろう。コロラドのスキー場はこの共通したエンターテインメント性を持ちながら、それぞれに違った装いと演出で訪れる人々を楽しませてくれる。



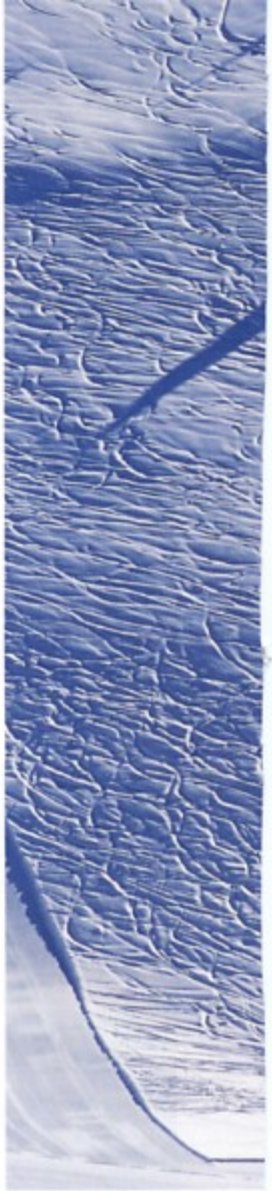
その機動力と圧雪技術の高さはまさに世界一。ヴェイルの圧雪部隊はさながら戦闘機のフォーメーションのように一糸乱れぬコンピネーションを見せる



C o l o r a d o R o c k y M o u n t a i n H i g h



1_ヴェイルが誇るバックボウル。写真のような斜面が腕を広げて待っている 2_広く、長いグルーミングバーンはコロラドのお約束。スキー板の性能も技術も、そして体力もごまかしが効かない 3_コブ斜面もアメリカでは大切なコースバリエーション。これぞ腕の見せどころだ



冒険を否定しない、それでいて徹底的に快適。それがアメリカ!

ヴェイルとアスペン ふたつの中心核

今回注目したヴェイルとアスペンは、コロラドの中心核をなすエリアである。州全域に点在する26カ所を滑り倒すには膨大な時間が必要であるため、ヴェイルとアスペンをメインにし

ながら効率良くまわるプランを考えるというのがセオリーだろう。このふたつのエリアを一度のツアーでまわることも不可能ではないが、そうなる現実にはただ慌ただしくめぐらだけのツアーになりかねない。コロラドらしさをゆっくりと味わうためには一カ所に腰を落ち着けてその周辺を滑ったほうがはるかに満足度は高い。一度にできるだけ多くのスキー場をまわるのではなく、2年、3年とかけてコロラドのコアでマニアックなスキー場に足を伸ばしていくことをお勧めしたい。

ヴェイルを滞在の拠点とした場合は、ビーバークリーク、ブレッケンリッジを含めたエリアが活動範囲となる。どちらも車で片道30〜40分の距離にあるので、気分に合わせて日替わりで選ぶことができる。たとえば行き帰り含めて10日間のスキー旅行ならば、この3カ所を滑りきるだけでも充分だろう。どうしてもという人は、さらにキーストンを訪れることも可能だ。

アスペンエリアには、ルート82沿いに4つのスキー場がずらりと並び、もっとも古い歴史を持ち、数多くの

アーティストやミュージシャン、政財界の人たちがセカンドハウスを置いているのがアスペン・マウンテン。麓にはかつてゴールドラッシュで栄えた煉瓦の街が広がり、重厚な雰囲気を持っている。一般的にアスペンと言ったときにはこの街を指す。

その隣に位置するのがアスペン・ハイランド。リフト降り場から山頂に1時間ほどハイイクアップすれば、斜度50度を越すような未体験ゾーンを滑ることができる。初級者に人気なのがバタミルク。コースは広く緩やかだが、山頂に登るとすばらしい景観を楽しむことができる。フロントゾーンではそのコンパクトなエリアを活かし、ウィンターXゲームなどのイベントが盛んに行なわれる。

そして、現在もっとも大規模な開発が進められているのがスノーマスだ。アスペン・マウンテンの場合、スキー場とタウンが完全に独立しているが、スノーマスはホテルとゲレンデが密接に関連し、スキーイン・スキーアウトが可能で、宿泊施設が多く、レストランやショップもそろっている。滞在先は迷うことなくスノーマスが良いだらう。4つのスキー場は無料のシャトルバスで連結されており、ひとつのスキーバスで自在に移動ができる。またローカル空港があるため、アクセスが非常に便利だ。富裕層は自家用ジェットを使ってやってくるのがごく普通の光景。日本との差を思わずにはいられない。





Photo_Jack Affleck

VAIL

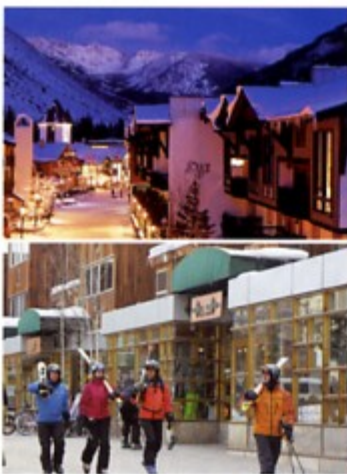
ヴェイル

世界一の施設とオペレーションを堪能する



索道の機動力の高さも世界最高水準。ボトムからイッキにスキー天国へと運んでくれる

もし降雪に恵まれたならファットスキーを借り、朝イチでゴンドラに並ぶことだ。こんなスキーも夢ではない



- 1
- 2
- 3



滑るばかりがスキーじゃない。太陽を浴び、心と身体を癒すことも大切な時間の過ごし方だ



1_夕暮れときには建物がライトアップされ、暖かな雰囲気を醸し出す 2_北米ではヘルメットが大切なスキーアイテム 3_エバーグリーンロッジの客室。広く、快適なステイが約束されている

北米を代表する高級山岳リゾート、ヴェイル。1962年12月にオープンして以来、その規模を拡大し続け、スキー場のフロントサイドに広がるピレッジはあたたかも巨大なテーマパークの装いでわれわれを迎え入れてくれる。ピレッジのなかにはブティックやブランドショップ、レストランがずらりと並び、ピレッジ内を探索するだけ

VAIL AREA & ASPEN AREA

でも楽しみは尽きない。リゾート内を無料のシャトルバスが循環しており、スキーを持ったままでも効率良く移動することができる。

ヴェイルにはいくつもの顔があるが、まず驚かされるのが、乾燥した雪質と目の前に広がるグルーミングバーンだろう。ゴルフ場に例えて表現するならば、良質な芝と徹底的にメンテナンスが施されたコースが延々と連なっているようなイメージだ。とくに朝一番のグルーミングバーンは、スキー用具の性能と持てる技術をすべて出し切る楽しさが味わえる。

降雪のあった翌朝などは多くのスキーヤーが早くから行動を開始し、真っ先に奥をめざす。まずはレジェン



ドバックボウルで手つかずのパウダースキーを楽しむ、さらにブルースカイベイソンにあるふたつのボウルを、機動力を活かして滑り尽くす。アバランチコントロール、レスキュー体制も整備されているので、安心してパウダーを味わうことができる。もし条件がそろいそうなときは、迷わず前日のうちにファットスキーをレンタルすることを勧めます。その広大なパウダーバーンを楽しむ機会に恵まれたなら、ヴェイルでの滞在は最高のぜいたくなることまちがいない。アフタースキーはヴェイルの真骨頂。夕暮れどきになると多くの滞在者がピレッジにくり出す。ナイトライフもどん欲に楽しみたい。

シーズン	11月19日～4月24日(2010/11予定)
ベース標高	2475m
サミット標高	3527m
標高差	1052m
面積	2140ha
トレイル数	193
トレイル総距離	-----km
最長距離	-----km
難易度	初級18%、中級29%、上級53%
リフト	33基
総降雪量	881cm

VAIL

BEAVER CREEK

ビーバークリーク

心躍る洗練されたたたずまい



1	2
	3
4	

1_ビレッジの中心はにぎわいの場。冬にはスケートリンクとなり、子供たちを喜ばせる
2_ワールドカップ高速系種目が開催される本格的コースを有しながら、雰囲気はどこもエレガント
3_子供たちのプログラムが充実しているため、ファミリー層の姿も目立つ
4_標高が高いため、長い間パウダーがそのままの状態を保たれる

リゾートをぜひ楽しんでほしい。



18 Beaver Creek

シーズン	11月24日～4月10日(2010/11予定)
ベース標高	2255m
サミット標高	3488m
標高差	1233m
面積	730ha
トレイル数	164
トレイル総距離	-----km
最長距離	6.4km
難易度	初級31%、 中級35%、 上級34%
リフト	16基
総降雪量	784cm



ヴェイルがフリーウェイ沿いに大きく広がっていく形で開発されたのに対し、ビーバークリークは谷間の限られたスペースをいかに効率的に美しく開発するか、そのマスタープランから徹底的に考えられたリゾートだ。開発がスタートしたのが1972年、札幌オリンピックが開催された年であり、ヴェイルのスキー場開発で得た経験を活かして、さらに価値のあるものを創ろうという意図が強く働いている。どうすれば少ないリフトで効率良く山全体を滑ることができ、切り開くコースは滑る人にとつてどのような楽しさを提供するもので

あるべきか、見る人にとってはどのような景色に見えるのか、建物の色や形はどう景観と調和するのか、などなど、コンピュータ・グラフィックスを使用し、当時の山岳リゾート作りの最先端の技術が投入された。

ここには超一流のホテル・コンドミニアムが名乗りを挙げ、ザ・バインズロッジ、パークハイアット、シエラトン、リッツ・カールトンなどが軒を並べる。

ビーバークリークのサミットは3488m。標高差は1000mを越す。その場所柄なのか、ゲレンデはいつも混雑知らず。初心者から上級者まで

飽きることのないバラエティに富んだ164のコースが用意されている。

FISアルペンスキー・ワールドカップの高速系種目を安定的に開催できる場所がしだいに限られてきているなかで、ビーバークリークはその安全でテクニカルなコース、豊富で安定した雪、落ち着いた雰囲気を提供し、ますます知名度を高めている。

ビーバークリークはビレッジのなかにスキー専用ロードがうまく整備されており、ほとんどの宿泊施設からスキーイン・スキーアウトをすることが可能。ショッピングモールなどはヴェイルの比ではないが、ジャクージ、温水プール、スケートリンクなど、ファミリーが喜ぶ施設はもちろんのこと、落ち着いた雰囲気でもゆとり過ごしたい大人のリゾートライフを満喫できる場所でもある。ヴェイルからは車で約20分。アメリカで最後に開発された究極のスキーリゾートをぜひ楽しんでほしい。

PAUL AREA



ASPEN AREA

BRECKENRIDGE

ブレッケンリッジ

世界のフリーライドシーンを牽引するリゾート

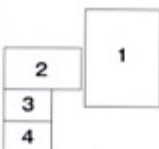
Photo_Jack Affleck



Photo_Liam Doran



1_巨大なハーフパイプが用意され、若者たちが順番待ちでメイクを楽しむ 2_編み目のように切り開かれたコースが麓からはっきりと見える 3_森林限界を超えるとそこはどこまでも続くオープンバーンだ 4_パイプ作りにも妥協がない。この徹底ぶりが強い選手を育てるのだから



Photo_Aaron Dodds.

VAIL AREA & ASPEN AREA

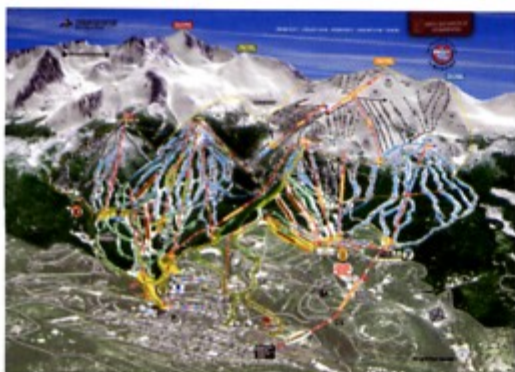
ヴェイルから車で約40分。裾野に広がる樹林帯が網目のようにカットされたスキー場が右手に見えてくる。スキー場の麓には1890年代にゴールドラッシュに沸いたブレッケンリッジの街が、西部開拓時代の面影を残しながら整然と並ぶ。アスペン同様、ここもリアルな生活が営まれてきた場所だが、その背後の山々の規模、ポテンシャルがスキーに適していたこともあり次々と開発が進められてきた。

ブレッケンリッジの特徴は、左右に連なる4つのピークと、その裾野に伸びる中・緩斜面。それぞれのピークに立てば、白と青に色分けされたロッキーマウンテンの連なりと切り開かれた樹林帯コー

ス、そして街並みまで一望することができる。目立つのはファミリースキーヤーとフリーライド系の人たちだ。ひとたび降雪に恵まれれば森林限界を超えたピーク周辺はパウダー天国となるが、裾野に近くなるほど長くきれいに圧雪された中・緩斜面が伸びる。ファミリースキーヤーや中高年スキーヤーにとって、ピークをめざす楽しさと、ロングツーリングが一緒に体験できるこの場所はとても満足度が高いというわけだ。

一方で、ハーフパイプやパーク施設の充実も全米屈指の規模で、フリーライド系のスキーヤー、スノーボーダーたちの腕試しの場となっている。こんな大きなパイプやジャンプ台を誰が楽しめるの？なんて心配はご無用。ここでは全米から腕自慢が集まり、派手な技を繰り広げてくれるので、ただ見ているだけでもわくわくさせられる。昔からフリースタイル系のイベントやワールドカップが開催されてきたこともあり、ブレッケンリッジは若者たちからも熱烈な支持を集めている。

ブレッケンリッジの名物は北米一高いところに伸びるインペリアル・スーパージュニア。標高は3852m。さらにピークへと徒歩で登ればそこは3963mだ。もちろん富士山頂よりも高い。というわけで、ほかのスキー場で標高に慣れから訪れるのがセオリー。街には日本食レストランもあるので、たとえ日帰りであっても、ぜひディナーも楽しんでほしい。



BRECKENRIDGE SKI RESORT

シーズン	11月下旬~4月中旬(HP、イベントスケジュールにて確認のこと)
ベース標高	2926m
サミット標高	3693m
標高差	1037m
面積	951ha
トレイル数	146
トレイル総距離	-----km
最長距離	-----km
難易度	初級14%、中級31%、上級55%
リフト	29基
総降雪量	761cm

ヒストリックタウンとしてこの古き良き時代の雰囲気を残す努力がなされている
Photo_Jeff Scroggins



SNOWMASS

スノーマス

次々と開発が進められるメガリゾート

Photo_Jeremy Swanson



スノーマスで開催されるフリーライドイベント。まさに命がけだ

アスペンエリア（アスペン・スノーマスと称されている）には4つのスキー場が軒を並べており、そのキャッチフレーズが「THE POWER OF FOUR」。その名のとおり、それぞれのスキー場が実に個性的であり、4カ所の力を合わせてエリア全体の魅力を醸し出している。日替わりで違ったスキー体験ができるのは実に楽しい。

スノーマスの滑走可能エリアは1267ha。総延長距離は237km。この大きさは、実はほかの3つのスキー場を合算した面積よりも広い。日本での認知度は、歴史あるスキー場として断然。アスペン（アスペン・マウンテン）に軍配が上がるが、規模としてはスノーマスのほうが圧倒的に幅を利かせている。

ビレッジはゲレンデに入り込む形で設計され、ほとんどの宿泊施設が目の前からスキーを履いて滑ることができ。その周辺のゲレンデはファミリースキーヤー向けのプロファイルだ。

一方、リフトを乗り継ぎ、山頂へと向かうTバーリフトに乗れば、景色は一変。360度雄大な山岳景観が広がる。サミットからはダブルブラックダイヤモンドの斜面がずらりと並び、挑戦意欲をかき立てる。この急斜面と中・緩斜面の対比がスノーマスの大きな魅力と言えるだろう。

スノーマスビレッジは、環境に優しく、かつファーストクラスのリゾートであることをめざすパイロットプログラムを実施しており、エネルギー効率、節



どのピークに登ってもはるか彼方まで見渡すことができる景色が待っている

ちょっとめずらしい交走式の連結ゴンドラ。ゆっくり乗り降りができるので子供たちのレッスンにも使われている

2 1



1_ウェイトレスのフレンドリーな笑顔が食事をさらに美味しくしてくれる 2_夕方のスノーマスビレッジ。スポーツショップ、レストランが並ぶ



SNOWMASS

シーズン	11月25日～4月10日(2010/11予定)
ベース標高	2473m
サミット標高	3813m
標高差	1340m
面積	1267ha
トレイル数	91
トレイル総距離	237km
最長距離	8.5km
難易度	初級6%、中級50%、上級12%、エキスパート32%
リフト	21基
総降雪量	762cm

水、CO₂排出を削減する「コミュニティ作り」をめざしているのも特徴のひとつ。こうした取り組みがこのエリアのブランドイメージを高め、ひいては集客にも結びついていると言えるだろう。



ASPEN アスペン・ハイランド HIGHLAND

ローカルスキーヤーに愛されるバックボウルが魅力

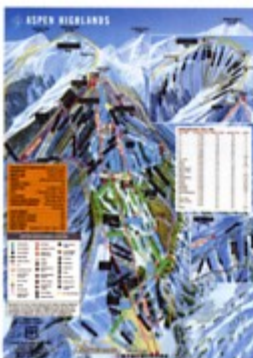
地元のスキーヤーに人気が高いのがアスペン・ハイランドだ。その理由はズバリ、ハイランドバックボウルがあること。バックボウルはリフト終点のロジックからさらに上、山の稜線をハイクアップした左手に広がるすり鉢状のエリア。ここはバトリールによってアバランチコントロールがなされており、腕に自信のある人たちがスキーを担いで稜線をどんどん登っていく。途中までは雪上車がピストン輸送してくれるというサービスあり。スキーを担ぐための簡易ロープもロジックの小屋で貸し出してくれる。雪上車を降りて細い稜線をハイクすること約40分でハイランドピークに到着。ここがアスペンエリアのベストビューポイントと言って良いだろう。ひととき景色を楽しんだあと

は、すり鉢のボトムに向かってドロップイン！もし転んだら延々と滑落していきそうな超急斜面。これが日本のスキー場だったら、まず100回オーバーンすることはないだろう。登ったほかに逃げ場がないので、腕に自信のある人だけにお勧めする。とにかくエキサイティングなスキーが楽しめることまちがいない。最後はそのままスキー場へと戻ってくるので、これを何度も繰り返す人もいるほどだ。



1・2 奥に見える急斜面がハイランドボウル。尾根づたいにハイクアップしていくと、左サイドのハイランドピークに到着する
3 トップからボトムまで標高差1108mのグルーミングバーンが続く
4 機能的に配列されたハイランドビレッジ。ビレッジから見るスキー場は一見小さく感じられるが、奥へ行くほどにポテンシャルが高まっている
5 アメリカの食事はまずい、というものはや昔の話だ

4
5



ASPEN HIGHLAND

シーズン	12月11日～4月24日(2010/11予定)
ベース標高	2451m
サミット標高	3559m
標高差	1108m
面積	416ha
トレイル数	119
トレイル総距離	135km
最長距離	5.63km
難易度	初級18%、中級30%、上級16%、エキスパート36%
リフト	5基(6500人/時間)
人工雪エリア	44.5ha(27%)
総降雪量	762cm

1_ クリフハウスからは目前にピラミッドピークを見ることが出来る
2_ コンパクトでハイウェイに近いので、イベントのテレビ中継に適しているという

2
1

BUTTERMILK

バターミルク



BUTTERMILK

シーズン	12月11日～4月3日(2010/11予定)
ベース標高	2399m
サミット標高	3018m
標高差	619m
面積	190ha
トレイル数	44
トレイル総距離	34km
最長距離	4.83km
難易度	初級35%、中級39%、上級26%、エキスパート0%
リフト	9基(8250人/時間)
人工雪エリア	44ha(27%)
総降雪量	508cm



小粒ながらも楽しさ、満足度満点！

アスペンにやってきたら、まず初めに足慣らしに訪れてほしいのがこのバターミルク。入り口は小さなローカルスキー場という感じだが、そのオペレーションのしやすさから、ウインターXゲームなどのイベントが頻繁に行なわれている。山頂に登ると正面にはピラミッドピークがそびえ立ち、アスペンハイランドの全景も見渡せる。4エリアのなかでもっとも小粒とはいえず、景色はとも良い。7割以上がフラットな中・緩斜面で、キッズ・スクールプログラムが充実しているのもこのスキー場の特徴。山頂には動物の足跡の説明や、かつて一帯が氷河に覆われていた頃の地質学的説明などのボードが設置されており、スノーシューイングも含め、自然環境体験プログラムにも活用されている。たとえ荒天のときもここなら安心だ。

ASPEN MOUNTAIN

アスペン・マウンテン

世界の著名人たちが集う
クラシック・リゾート

Photo: Daniel Bayer



- 1
- 2
- 3

1_ゲレンデは北斜面なので、つねに安定した条件が用意されている
2_ツリーランコースにはエルビス・プレスリーの標識が 3_かつてのアルペンレーサーたちの写真が古き良き時代を彷彿とさせる



Photo: Matt Power



ここアスペン・マウンテンとアイダホ州のサンバレーは、アメリカでもっとも古い歴史を持つスキー場として知られ、そのステイタスの高さは今も変わることがない。開業は1947年。ハリウッドスターやミュージシャン、実業家などが最初にここでスキーを楽しんだことで知名度が上がり、かつてゴールドラッシュで栄え、廃墟寸前であった街がみごとに復活。作り物ではない、歴史あるリアルな街並みがさらに人気を集めている。できるならスキー靴を脱ぎ、街並みをゆっくり散策する時間をぜひ作って

ほしい。ヴェイル同様に高級ブティックやレストランが並ぶものの、もっとも大きな違いは、そこに本物の生活が存在しており、魅力的な住人が大勢いることだ。長く滞在すればするほど、人々がこの街を愛する理由がいくつも見つかるはずだ。
ボトムから延びるシルバークイーンゴンドラに乗れば、標高3418mのサンデッキまでひと息に登り詰める。ゴンドラからはアスペンの整然とした街並みがとても印象的に映る。トップにあるレストランにはかつて活躍したアルペンレーサーたちの古い写真も展示され、大きな窓からロッキー山脈の景色を眺めながらランチが楽しめる。
アスペン・マウンテンのおもしろさはその地形にある。多くのスキー場がねじれの少ない一枚バーンが確保できる場所を選定してスキー場を作ったのに対し、アスペン・マウンテンは、尾根筋あり、谷筋あり、シュートのような斜面ありと非常に複雑な山岳地形にリフト

4.5_雄大な景色を堪能できるように大きな窓が配されたサンデッキのレストラン。思わぬ著名人に出会うかも

- 4
- 5



がかけられた結果、ラフで大胆でワイルドな楽しさにあふれている。尾根筋から谷筋へと向かうルートはどこも急斜面で、谷筋はボトムまで続くロングラン。スキーレースをするような場所としては適していないが、他のどことも違うけっして飽きることはない個性的でチャレンジングなコースプロファイルが実に楽しい。街もゲレンデも借り物でも作り物でもないオリジナルであることが、長く多くの人に愛され続けるアスペン・マウンテンの理由だろう。

ASPEN MOUNTAIN

シーズン	11月25日～4月10日(2010/11予定)
ベース標高	2422m
サミット標高	3418m
標高差	996m
面積	273ha
トレイル数	76
トレイル総距離	103km
最長距離	4.83km
難易度	初級0%、中級48%、上級26%、エキスパート26%
リフト	8基
総降雪量	762cm

ASPEN AREA

& CHAIL AREA